Ⅲ　集団活動等における指導の在り方

子どもたちが望ましい集団を形成し、将来にわたって豊かに責任をもって生きていくためには、学校が家庭や地域と連携を十分に図りながら、様々な教育活動に取り組む必要があります。

保護者や地域の方々が集団活動等を通じて子どもたちと関わる際に、教育相談の考え方や手法を活用してもらうための資料として、平成 25 年度、リーフレット「家庭や地域で生かせる子どもとの関わり方」（巻末参照）を作成しました。

本リーフレットには、学校における教育相談の考え方や手法を取り組む際の留意点や、家庭や地域における、教育相談の考え方や手法の具体的な事例が記載されています。学校が教育相談の考え方や手法を集団活動に取り入れたり、学校が地域や家庭と連携して、集団活動等を工夫したりする際に活用することができます。

以下、本リーフレットの概要について説明するとともに、本リーフレットを活用する際の視点を示します。

1　教育相談の考え方や手法を取り入れた集団活動等の工夫

望ましい集団を形成するためには、教育相談の考え方や手法を生かし、教師の児童生徒理解を進めるとともに、児童生徒の人間関係を深め、児童生徒自身の自己表現の力を高める必要があります。

（1）　児童生徒理解を進める

児童生徒理解は生徒指導の基盤です。児童生徒理解は、一人一人の児童生徒を客観的かつ総合的に認識することが第一歩であり、日ごろから一人一人の言葉に耳を傾け、その気持ちを敏感に感じ取ろうという姿勢が重要です。思春期の場合には、子どもから大人への急激な成長の変化をとげる時期であり、様々な不安や悩みを経験しながら自分自身を見付けていきます。人は理解してくれている人には安心して心を開きますが、理解してくれていない人に対しては拒否的になり、心を閉ざしたまま対応するものだからです。しかも生徒指導においては愛と信頼に基づく教育的関係が成立していなければその成果を上げることはできません。生徒指導はまず児童生徒理解から始まります。

子どもが安心して過ごしたり、自分の気持ちを分かってもらえたり、認められていると感じたりするためには、「安心感や楽しさ、充実感を与える」「よくほめる」などの関わりが必要です。

教育相談においては、子どもの話に耳を傾けることを「傾聴」といいます。また、聞き手が自分の気持ちを脇において、子どもの気持ちを推し量りながら聴くことを「受容」と言います。

話の内容によっては、批判したくなる場合もありますが、共感的な態度で話を聴くことが大切です。受容的で温かい雰囲気、話の内容にかかわらず傾聴する姿勢は、児童生徒の不安を和らげ、より的確な児童生徒理解へとつながると考えられます。

児童生徒理解を進めるには、傾聴や受容のほか、「繰り返し」や「明確化」など、教育相談の手法を理解し、取り入れることが大切です。

このような関わりを心掛けることで、子どものもつ「悩み」や「不安」の解決を手助けすることができます。

「傾聴」や「受容」を生かした関わり方	
「傾聴」	子どもの顔を見ながらうなずいたり、受け止めの言葉を発したり、こちらから質問したりするなど、丁寧かつ積極的に話に耳を傾けます。 例：「うん、うん」「それは大変だったね」「つらかったんだね」
「受容」	反論したくなったり、批判したくなったりする気持ちを脇において、子どものそうならざるを得ない気持ちを理解しながら聴きます。 例：「そうだったんだね」「あなたの気持ちはわかるよ」
「繰り返し」	児童生徒がかすかに言ったことでも、こちらが同じことを繰り返すと、自分の言葉が届いているという実感を得て児童生徒は自身を持って話すようになります。 例：児童生徒「もう少し強くなりたい」 教師　「うん、強くなりたい」
「明確化」	うまく表現できないものを言語化して心の整理を手伝います。 例：「君としては、こんなふうに思ってきたんだね」

（2） 人間関係を深める

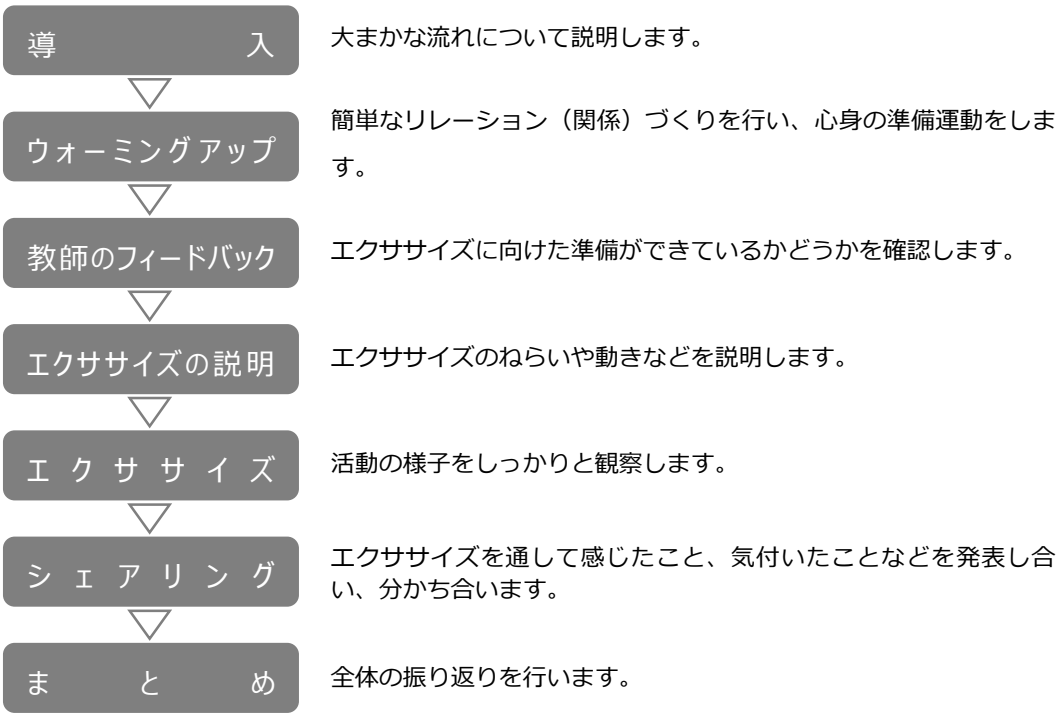
学校においては、子どもたちが構成的グループエンカウンターを実施することにより、自分や他者の理解を深め、温かな人間関係づくりのスキルを身に付けさせることができます。

「エンカウンター」とは、「出会う」という意味で、意図的に組み立てられたグループ活動を通して、集団のもつプラスの力を最大限に引き出す活動です。子ども同士の相互理解が進み、協力して問題解決する雰囲気をつくることができます。学級づくり等のほか、保護者会にも活用ができます。

ねらいや目的に応じて様々なエクササイズがありますので、児童生徒の実態に合わせタイムリーに実施するとともに、ねらいを明確にし、単なる遊びにならないよう、けじめをつけることが大切です。

構成的グループエンカウンターの進め方

構成的グループエンカウンターは、ねらいや目的に応じて様々な種類がありますが、学校の教育活動においては、次のような流れで行います。



（3） 自己表現の力を高める

「アサーション」は、自分も相手も大切にする自己表現のことです。言いたいことがうまく言えなかったり、言い方が分からなかったりする場面で活用することができます。

アサーティブな表現を活用することで、相手やその時の状況について自分はどう感じているかを正直に相手に伝えることができます。言われた相手は「責められた」という感情を抱きにくく、素直にそのことを認めやすくなります。

日常の人との関わりの中には、自分と相手との以降や方針が一致しないことがあります。そのような場合にアサーティブな自己表現をするためには、次の 3 点について考えることが有効です。

1　まず、自分の思いを確かめる（自分の本心、自分はどうしたいのか）
2　相手と事実や状況を共有する（相手と分かち合う必要がある事実はないか）
3　相手にとってほしい行動などについて具体的に提案する

学校生活では、自分の意見が相手と異なることがあります。次の 3 つの自己表現を比較させるなど、子どもたちにアサーティブな表現のよさを理解させることが大切です。

3 つの自己表現（誘いを断る場面の例）

1　攻撃的（アグレッシブ）な自己表現
自分は大切にするが、相手は大切にしない表現
例：「ええっ、行きたくないよ、なんで私を誘うの？」

2　非主張的（ノン・アサーティブ）な自己表現
相手は大切にするが、自分は大切にしない自己表現
例：「…うーん（行きたくないなあ）どうしよう…いいよ…」

3　アサーティブ（アサーションを生かした）な自己表現
自分も相手も大切にする表現
例：「誘ってくれてありがとう。でも今日は○○があるんだよね。だからこの次のときに一緒に行こうね」

2　家庭、地域との連携

学校が家庭や地域と連携して集団活動等を行う際には、教育相談の考え方や手法を生かして、活動の雰囲気を意図的につくったり、子どもの気持ちや考えを受け止めたり、子どもが相手に思いを上手に伝えたりできるようにすることが大切です。

リーフレット「家庭や地域で生かせる子どもとの関わり方」を、家庭や地域でより効果的に活用する方策を検証するため、道研教育相談担当者研修講座の受講者及び研究協力校に、本リーフレットの活用場面についてアンケート調査を行いました。

Q.　本リーフレットを活用するとすれば、どのような場面で活用しますか

・校外学習やゲストティーチャーを招く際、活動を工夫するため、講師との打合せで活用
・地区懇談会、ＰＴＡ総会、ＰＴＡ研修、三者面談、家庭訪問、参観日等の保護者向け資料として配付
・教育相談に関する研修等の参考資料
・保護者との懇談会で、子どもとの関わりについて話し合う時に活用
・子どもとのコミュニケーションで悩んでいる保護者へ配付
・集団カウンセリングの前に生徒へ配付　など

調査では、教育相談の考え方や手法を生かした、家庭や地域と連携する場面として、「外部の方とティームティーチングを行う場合」や「子どもとの関わり方について保護者との共通理解を図る場合」等が挙げられました。

例えば、インターンシップの受入先の関係者や、総合的な学習の時間等における講演会の講師との打合せを行う際、活動のねらいや育てたい子どもの姿の共通理解を図るとともに、具体的な活動の進め方の一つの方法として、本リーフレットで示した教育相談の考え方や手法を活用することができます。

また、ＰＴＡ総会やＰＴＡ研修の際、保護者に向けて教育相談の考え方や手法を説明するなど、学校と家庭とが子どもへの指導に対する共通理解を図ることにより、より一層児童生徒理解を進め、子どもが安心して生活できる環境を整えることができます。

保護者や地域の方々が集団活動などを通じて子どもたちと関わる際、本リーフレットを活用し、教育相談の考え方や手法を生かすことにより、生き生きと主体的に行動できる子どもの育成や、愛情をもって子どもを育てていく家庭や地域の教育力の向上につながります。